

【学力向上フロンティアスクール用中間報告書】

都道府県名	秋田県
-------	-----

学校の概要（平成15年4月現在）

学校名	横手市立横手西中学校					
学年	1年	2年	3年	特殊教育	計	教員数
学級数	1	1	1	0	3	12
生徒数	28	37	40	0	105	

研究の概要

1 研究主題

主体的に学び，確かな学力を身に付けさせるための学習指導の工夫 ～ 個を生かす指導を通して ～
---

2 研究内容と方法

(1) 実施学年・教科

<p>全学年・全教科等</p> <p>生徒の実態から，特に育てたい力を「思考力・判断力，豊かな表現力」と定め，各教科等全体で取り組んでいくため。</p> <p>少人数指導</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3年数学，3年英語 1年生のときは，数学と英語で20人の2クラスに分けての少人数指導を中心に，2年生のときは40人を二人で指導するTT授業を中心に継続して研究を進めているため。</li> <li>3年技術・家庭 実習や用具等を考慮して，技術分野と家庭分野に分けて学習するため。</li> </ul> <p>TT</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>2年国語，3年国語 クラスの生徒数がそれぞれ37人，40人と多く，机間指導が十分にできないため。</li> <li>1年社会 調べ学習を多く取り入れるには，二人による指導が効果的と考えたため。</li> <li>1,2年数学，1,2年英語 習熟度の差が出やすい教科であり，より個に応じた指導が必要と考えたため。</li> <li>1,2年理科 観察や実験などの学習が多く，二人による指導が効果的であると考えたため。</li> </ul> <p>中高連携による授業実践</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>3年数学，1年理科，2年英語，1年音楽 昨年度より取り組んでいる中・高の連携による授業の実践を進め，高校教員とのTTによる指導の効果を研究するため。</li> </ul>
--

(2) 年次ごとの計画

<p>テーマ 主体的に学び，確かな学力を身に付けさせるための学習指導の工夫 ～ 個を生かす指導を通して ～</p> <p>研究の見通し（仮説）</p> <p>各教科，道徳，特別活動，総合的な学習の時間の特性を生かし，次の～の視点に立って，生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導をすることにより，生徒は主体的に学び，確かな学力を身に付けることができるであろう。</p> <p>習熟の程度に応じた学習や選択教科における教材開発を推進する</p>
---

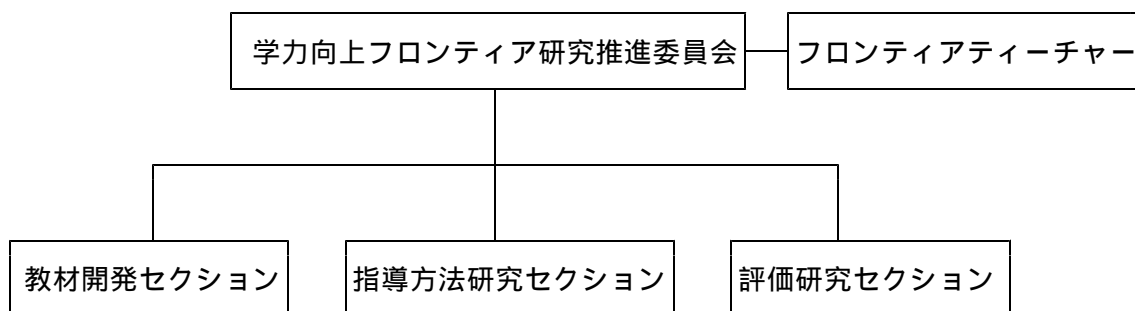
平成15年度	<p>少人数化やT Tなどの指導方法や指導体制の工夫改善を推進する          評価を生かした指導の工夫改善を推進する          小・中・高の連携を推進する</p> <p>研究の内容と方法</p> <p>1．教材開発セクション</p> <p>習熟の程度に応じた学習指導のための教材開発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1年数学...計算力の程度に応じたコース別学習</li> </ul> <p>他教科の学習指導を利用した教材開発</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 1年数学...数学的な見方・考え方を育てるための実験を利用した授業</li> </ul> <p>2．指導方法研究セクション</p> <p>少人数化...学習内容や実習等を考慮</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 3年の数学と英語...20人の2グループに分けて数学と英語の学習</li> <li>・ 3年の技術・家庭...20人の2グループに分けて技術分野と家庭分野の学習</li> </ul> <p>T T...免許教員と免許外教員による1 C 2 T</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 2,3年国語 , 1年社会 , 1,2年数学 , 1,2年理科 , 1,2年英語</li> </ul> <p>小集団学習を取り入れた指導方法の工夫改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 単元や題材の中で必要に応じて行う</li> </ul> <p>小・中連携による授業交流</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 小6年理科...黒川小学校教員とのT T</li> </ul> <p>中・高連携による授業実践</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 横手工業高校の教員と数学, 理科, 音楽, 英語で1 C 2 Tや1 C 3 Tを実施</li> <li>・ 横手工業高校でT Tを実施(高1年数学, 高2年英語)</li> </ul> <p>本校のテーマに沿った各教科の実践</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各教科で「特に育てたい力」をまとめ, 実践集録を作成する</li> </ul> <p>3．評価研究セクション</p> <p>評価(自己評価や相互評価)の工夫と指導への生かし方</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 社会, 理科, 音楽, 美術, 保健体育, 英語など</li> </ul> <p>学習状況調査の結果分析とその活用</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 教科やその内容ごとに到達度を分析し, 指導方法の改善を図る</li> </ul> <p>観点別評価問題の作成</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 定期テストでは, 観点別に問題作成をする</li> <li>・ 達成度が低い内容については, 解説や補充などを必要に応じて行う</li> </ul> <p>通信箋の工夫改善</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>・ 各教科の基礎・基本の定着の状況が保護者や生徒に分かるようにする</li> </ul>
--------	--

平成16年度	<p>テーマ 主体的に学び, 確かな学力を身に付けさせるための学習指導の工夫          ~ 個を生かす指導を通して ~</p> <p>研究の見通し</p> <p>各教科, 道徳, 特別活動, 総合的な学習の時間の特性を生かし, 次の ~ の視点に立って, 生徒一人一人の実態に応じたきめ細かな指導をすることにより, 生徒は主体的に学び, 確かな学力を身に付けることができるであろう。</p> <p>習熟の程度に応じた学習や選択教科における教材開発を推進する</p> <p>少人数化やT Tなどの指導方法や指導体制の工夫改善を推進する</p> <p>評価を生かした指導の工夫改善を推進する</p> <p>小・中の連携を推進する</p> <p>研究の内容と方法</p> <p>習熟の程度に応じた学習指導のための教材開発</p> <p>他教科の学習指導と関連した教材開発</p>
--------	--

少人数化...学習内容や実習等を考慮  
 T T...免許教員と免許外教員による1 C 2 T  
 グループ学習を取り入れた指導方法の工夫改善  
 小・中連携による授業交流の実践  
 本校のテーマに沿った各教科の実践  
 評価（自己評価や相互評価）の工夫と指導への生かし方  
 生徒の変容に関する調査と結果分析  
 公開研究会  
 研究のまとめ

### (3) 研究推進体制

研究組織は、教材開発セクション、指導法研究セクション、そして、評価研究セクションの3つのセクションを設け、9名の教科担任が研究内容によってメンバーを構成していく。



## 平成15年度の研究成果及び今後の課題

### 1 研究の成果

#### (1) 数学や英語の少人数指導より

40人を2グループに分けて少人数指導を行うと、次のような効果があることを実感できる場面が多かった。

- ・ 学習習慣をより一層定着させることができた。
- ・ 一人一人の発表の機会が増え、全員に自分の考えを発表させるときに有効であった。
- ・ ドリル学習や英語の「話す」「書く」活動のときに、一人一人にかかわる時間をより多く確保できた。
- ・ 40人の前で発表するより少人数学習の中で発表する方が、発表への抵抗が小さくなり緊張の度合いも少なくなった。
- ・ 分からないことがある時に質問しやすいと感じる生徒が多かった。
- ・ ペア活動やグループ活動を行う際、目が行き届きやすかった。

<資料1「数学や英語の少人数指導について」の生徒アンケート>

Q1. 20人ずつの2クラスに分けた授業と40人を2人のT Tで教える授業のどちらが好きですか

	数 学	英 語
20人ずつの2クラスに分けた授業	71%	90%
40人を2人のT Tで教える授業	29%	10%

Q2. 二つに分けるととき、どんな分け方がよいか（複数回答可）

	数 学	英 語
機械的に二つに分ける	26%	58%
得意と苦手を均等割に分ける	26%	12%
基礎と発展を希望で分ける	45%	23%
得意と苦手を習熟度で分ける	26%	18%

数学は3年生38名（平成15年4月実施）、英語は3年生39名（平成15年6月実施）

## (2) 計算力の程度に応じたコース別指導より ~ 1年「方程式」の指導~

- ・ 習熟の程度で分ける場合は、生徒が不安をもつので、基礎コースと発展コースを設定し、自分で選択させ、それを優先することが必要であった。
- ・ 『じっくりコース』では、「すごく分かりやすい」「人数が少ないと発表しやすい」などの感想が多く、少人数の中でゆっくりとしたペースで行うことを歓迎している生徒が多かった。TTによる授業より分かるようになったことで、方程式の計算に自信をもってきたことが分かる。
- ・ 『どんどんコース』では、「だんだん分かってきたので楽しい」「計算が速くできるようになった」「よく分からなかったので、たくさん練習したい」など、複雑な問題が多いにもかかわらず、ねばり強く取り組んでいる生徒が多かった。分からないときは、先生に質問したり家庭学習で復習をしたりするなど、主体的な学習にも結び付いていた。

<資料2 授業後の自己評価カードから>

時間	学習形態	評価の観点	じっくりコース	どんどんコース
1~4	TTによる一斉授業	楽しく学習できたか	+2.30	+2.65
		分かった・できたか	+2.13	+2.63
5~8	計算力の程度に応じたコース別授業	楽しく学習できたか	+2.35	+2.62
		分かった・できたか	+2.40	+2.44

A : +3 B : +2 C : +1とした1単位時間の生徒平均

## (3) 実験の手法を取り入れた数学の授業より ~ 1年「比例・反比例」~

- ・ 修学旅行でもっていく千羽鶴を利用したことにより、学習課題に対して生徒の必要感がわき、意欲的に取り組んでいた。
- ・ 実験の手法を取り入れることやグループ活動を利用することにより、課題を解決するための手順を自分たちで考えて発表することが抵抗なく行われた。また、「その方法で求められるか」という視点で意見交換が行われた。
- ・ グループで考えた方法をもとにして、千羽鶴の数を予想しては実験で確かめていた。
- ・ 学習をした経験を生かして、比例の利用の問題を解ける生徒が多い。
- ・ 理科担当とのTTにより、授業の全体構想に実験の手法を取り入れることが容易であった。シートや教具について話し合いながら準備を進めることができた。

## (4) 自己評価と相互評価を取り入れた理科の授業より ~ 3年「生物の細胞のふえ方」~

- ・ 昨年度まではグループ発表であったが、今年は個人発表による実践を試みた。その結果、人任せの傾向が強かった生徒が自分なりの発表を目指して頑張るようになった。
- ・ 相互評価カードを用いることで、他の生徒を意識するようになり、どうすればうまく伝えられるかを考えるようになった。
- ・ 自己評価カードを発表後と、他の生徒が書いた自分の評価を読んだ後も書かせるなどして、自分の思っていることと他の生徒の見方との違いを分析させた。多くの生徒が、次は頑張りたいなど意欲が高まり、自己評価を詳しく書けるようになった。

## 2 今後の課題

### (1) 数学や英語の少人数指導より

- ・ 数学も英語も時と場合によっては、40人の一斉授業や習熟の程度に応じたコース別学習を行った方がよいと思うときがある。それぞれの教科の計画があるので、タイミングを合わせることは難しいが、必要に応じて授業交換をしたり、他の先生の協力を得たりしながらTTで進めていく必要がある。

### (2) 計算力の程度に応じたコース別指導より

- ・ 基礎コースでは、計算のスピードが遅く、多くの問題をこなすことができないので、演習の時間が必要になる。発展コースでは、自分の力で問題を解決できる生徒や授業が分からなかったということでもなかなか問題に取り組めない生徒など、理解力や計算力に新たな差ができた。ねらいに応じたコース分けとそのコースでの個に応じた対応を工夫する必要がある。

### (3) 理科実験の手法を取り入れた数学の授業より

- ・ 「見通しをもって方法を考えることができる」というねらいは実現できたものの、誤差の取扱いが問題となった。他教科と関連した内容を取り入れる場合は、ねらいの実現が十分にできるように教材や展開を工夫する必要がある。

### (4) 自己評価と相互評価を取り入れた理科の授業より

- ・ 各生徒がプレゼンテーションを行った後、はじめは教師が発表の趣旨をまとめてから相互評価を行ったが、それでも発表の趣旨をつかめた生徒は数人しかいなかった。他教科等でも計画的に、このような活動を取り入れていく必要がある。

## 学力把握のための学校としての取組

「学習に関する実態調査」の実施（4～6月、2月）

数学や英語の少人数指導に関する意識調査を通して、授業における指導方法の改善に生かし、その成果を検証する。

自己評価「2004年に向けての自分の課題は何か？」の実施（12月）

生徒の基本的学習姿勢や学習習慣等についてのアンケートを取り、生徒の実態から次年度の研究の方向性をつかむために実施した。

年4回の全校テストの実施（6・9・11・2月）

国語、社会、数学、理科、英語の5教科でテストを作成し、観点ごとに実施することにより、達成状況を分析した。また、実施後、観点ごとに自己反省をさせた。

年4回の基礎確認テストの実施（5・8・10・1月）

国語、社会、数学、理科、英語の5教科で、基礎学力の定着をねらい、自己目標点を設定させて取り組ませた。

CRTの実施（2月）

3年生のこの一年間の学習内容の定着状況を把握し、3年間の指導の成果を分析する。

「学習状況調査」・「学習に関するアンケート」の実施（県・7月）

各教科の基礎・基本の達成状況が確認でき、成果と課題などが分析できた。また、学習や各教科の好き嫌いなど、3年間の生徒の変容も知ることができた。

## フロンティアスクールとしての研究成果の普及

横手市教育推進協議会の公開研究会やフロンティアスクールの自主公開などへの参加

- ・ 他校の取り組みにアドバイスや本校の取り組みの紹介をする。

県南「確かな学力」向上推進協議会において実践発表

平成16年1月21日、ふるさと村

- ・ ワークショップによる実践発表を行う。

実践事例の紹介

- ・ 小中高の連携を通じた実践事例を近隣の学校へ紹介する。

研究紀要「いぶき」による実践紹介

平成16年3月に完成

- ・ 市内の小学校、郡内の中学校に配布し、各教科等の取り組みを紹介する。

公開研究会

平成16年10月29日（予定）

- ・ 国語、社会、数学、理科、美術、保健体育、英語などの授業を公開する。
- ・ 少人数指導やTT、自己評価と相互評価、ねらいに応じた教材開発や特に育てたい力「思考力、判断力、豊かな表現力」の育成などに関する実践を紹介する。

次の項目ごとに、該当する箇所をチェックすること。(複数チェック可)

【新規校・継続校】  15年度からの新規校  14年度からの継続校

【学校規模】  3学級以下  4～6学級  
 7～9学級  10～12学級  
 13～15学級  16学級以上

【指導体制】  少人数指導  T・Tによる指導  
 その他

【研究教科】  国語  社会  数学  理科  
 外国語  音楽  美術  技術・家庭  
 保健体育  その他

【指導方法の工夫改善に関わる加配の有無】  有  無